

The 40th 第40回東京モーターショー2007

TOKYO MOTOR SHOW 2007 News vol.7



平成19年10月31日

世界に、
未来に、
ニュースです。

Catch the News,
Touch the Future.

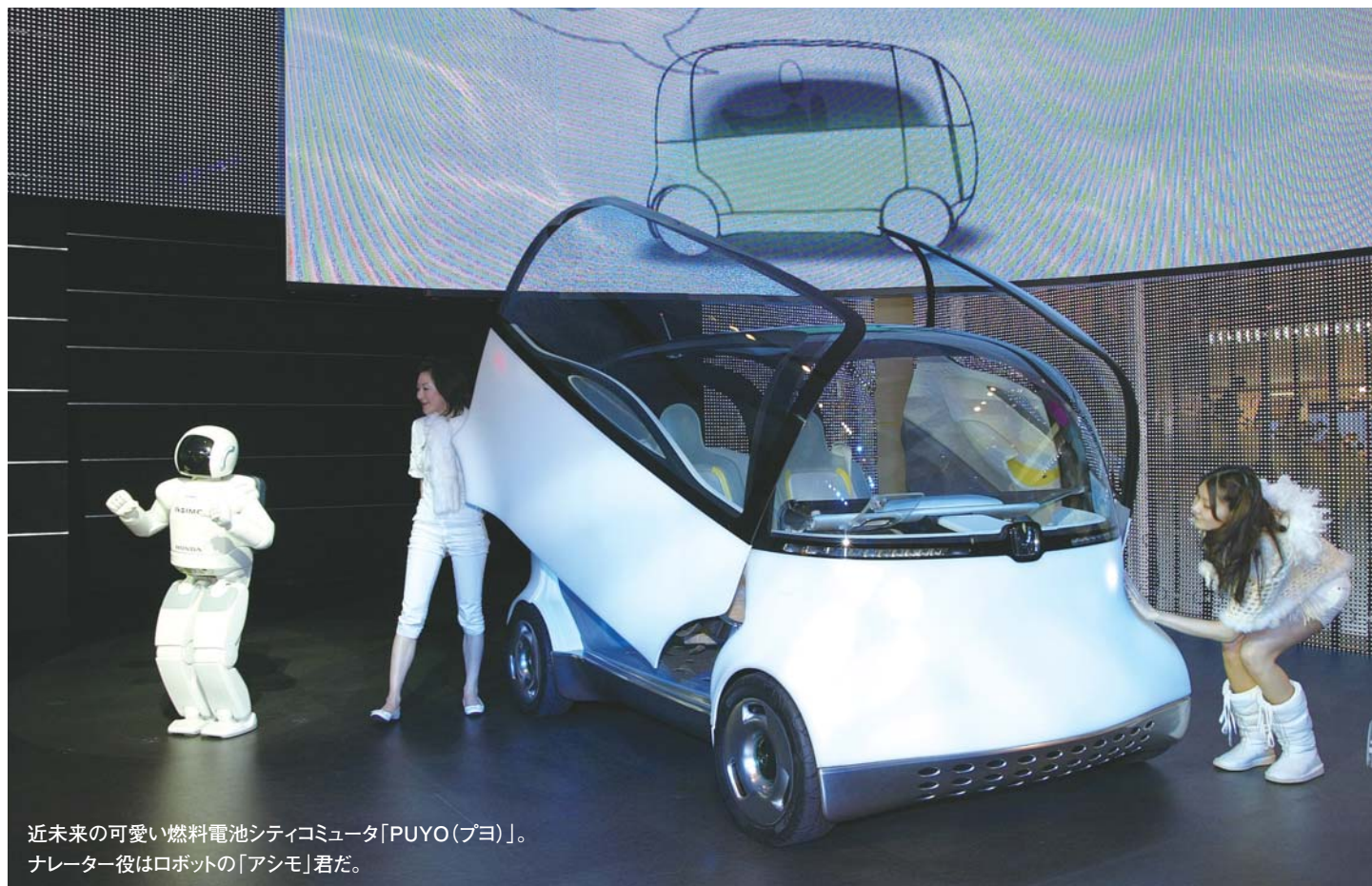


本田技研工業

「地球環境」と「クルマの楽しさ」の共生を どこまでも追い求めて



HONDA



近未来の可愛い燃料電池シティコムータ「PUYO(プヨ)」。
ナレーター役はロボットの「アシモ」君だ。

「地球環境」と「クルマの楽しさ」の共生を、どこまでも追い求めていくという「HECT」(ホンダ アース コンシャス テクノロジー)——それを象徴する世界が、ブース中央奥のコンセプトゾーンで華やかに展開される。

ステージの左サイドに展示された次世代燃料電池車「FCXコンセプト」は、来年に日・米で限定販売が予定されている量産型燃料電池車のベースカー。そのナレーター役を務めたホンダ二足歩行ロボット「アシモ」君が、今度はステージ右へと小走りに移動して、来場者の視線を誘導する。リズミカルな音楽とともにスポットライトを浴びて登場するのは、近未来の可愛い燃料電池シティコムータ「PUYO(プヨ)」だ。

全長2,800×全幅1,650×全高1,650ミリ、ホイールベース1,850ミリの小さな発光ボディで4人乗り、ベツのような親しみのある表情とシリコン素材を使った思わず触ってみたくなるような柔らか

いジェルボディを持ち、360°の定点回転ができるこのシティコムータの提案は、「環境とクルマ」、「人とクルマ」のかかわりを重視するホンダの今回ショーでの本命パフォーマンス。そして「FCXコンセプト」と「PUYO」と、登場するだろう時代のかけ離れた2台の燃料電池車の間が、両車に搭載した独自開発の小型軽量FCスタックでつながっていることをホンダはアピールしてみせている。

今回ショーでのホンダの展示テーマは「この地球で、いつまでもモビリティを楽しむために」。他にも「PUYO」とともに世界初出品となるハイブリッドライトウェイトスポーツの「CR-Z」や、ガソリン車並みのクリーン性能を求めた「i-DTEC」ディーゼルエンジンをコンセプトモデルとして展示し、「環境」と「クルマの楽しさ」の両方に挑むホンダの姿を印象付けている。



ライトウェイトスポーツコンセプトモデル「CR-Z」

今回ショーでのホンダ展示は、環境対応型パワーユニットの進化をベースにしたニューモデルショーといったイメージが強い。

ライトウェイトスポーツ「CR-Z」(デザインスタディモデル)は低回転・高回転・気筒休止の3段階でバルブ制御する3ステージ「i-VTEC」エンジンとIMA(インテグレートッド・モーター・アシスト)の組み合わせで、低回転域からトルクフルな走りと超低燃費を両立させた小型ハイブリッド車。「これをベースとした市販車の早い時期の商品化をめざす」(福井社長)という。



6年ぶりにフルモデルチェンジした「新型フィット」シリーズ

プレスブリーフィングから

様々な技術のチャレンジで「環境トッランナー」をめざす

本田技研工業
福井 威夫 社長



本田は「環境問題」への取り組みを経営の最重要課題のひとつとして、「環境トッランナー」をめざして積極的に取り組んできました。環境技術では地域の特性に合わせて、様々なアプローチがある。とくに製品での取り組みは燃料電池、ハイブリッド、ディーゼル、ガソリンの低燃費化、さらにはエネルギーを創り出すための技術まで、本田はあらゆる可能性を独自の発想と技術で追求し、グローバル規模でのCO₂削減を加速していきます。今回のモーターショーでは、こういった私どもの環境技術の様々なチャレンジをご理解頂きたいと思っています。

燃料電池車の「FCXコンセプト」は、「PUYO」にも搭載している小型軽量の「V Flow」FCスタックによって課題であった水マネジメントを解消させ、モーターとギアボックスの同軸化による車体の前後長の短縮と合わせ、低床・ショートノーズの流麗なボディシルエットを実現させている。モーターの最高出力は初代「FCX」より15キロワット向上、1,500rpm高回転化させて、全域でトルクフルな走りができる。来年の日・米市場での限定発売を前に、来月のロサンゼルスオートショーでこのコンセプトモデルをベースとした市販車を発表する予定だ。



燃料電池車「FCX コンセプト」

さらにコンセプトゾーンには、燃焼室の形状最適化やNO_x(窒素酸化物)を低減するコンパクトな触媒システムの装着によって、世界一厳しい米国の排出ガス規制「Tier II Bin5」をクリアすることを可能にした新開発のクリーンディーゼルエンジン「i-DTEC」の構造モデルを展示している。



クリーンディーゼルエンジンの「i-DTEC」



低燃費化を図った「インスパイア」プロトタイプ

今回ショーで、本田は環境対応への積極取り組みをアピールするためか、他にガソリンエンジンでも高級ミドルセダン「インスパイア」のプロトタイプ出品に合わせて低燃費化を図った搭載エンジン「i-VTEC VCM」を展示。さらには国内市場の再活性化へ向けて、6年ぶりにフルモデルチェンジした代表車種「新型フィット」シリーズがブース前面にズラリと並んで来場者の注目を集めているが、このコンパクト市販車コーナーにも「新型フィット」搭載の燃費性能を高めた1.3リッター「i-VTEC」が組み合わせ展示されている。こうした展示レイアウトも今回のホンダブースの特色といえるだろう。

フォルクスワーゲン

小さいのに広い!! —— コンセプトカー「SPACE UP!」が人気



フォルクスワーゲンブースのメインステージに展示されているのは、ワールドプレミアの「SPACE UP!」。コンパクトなトールワゴンボディの後部にエンジンを搭載し、全長4.5メートル級の室内の広さを3.68メートルのボディで実現したというのが特徴。フロアで来場者の注目を集めていたのはジャパンプレミアのコンパクトSUV「ティグアン」。

同じくジャパンプレミアの「パサートヴァリアント R36」は3.6リッターV6(250馬力)を搭載したスペシャルモデル。ブースではこのほか、市販モデル、7速DSG変速機(機械式AT)、直噴ディーゼルなどの展示も行われていた。



コンパクトカー「SPACE UP!」



「パサートヴァリアント R36」



コンパクト SUV「ティグアン」

アウディ

ハイブリッドスポーツなど新世代モデルの提案続々



ハイブリッド・スポーツコンセプト「メトロプロジェクト・クワトロ」

アウディブースに登場した注目のワールドプレミアは、真っ赤なボディカラーをまとったハイブリッド・コンパクトスポーツコンセプト「メトロプロジェクト・クワトロ」。1.4リッターガソリンエンジンで前輪を、電気モーターで後輪を駆動する。

車内にはカーナビ、オーディオプレーヤー、クルマへのアクセス認証などの機能を持つ携帯端末「アウディ・モバイルデバイス」が装備されている。ジャパンプレミアモデルは、アウディにとっては久しぶりのクーペモデルとなる「S5 4.2 FSI クワトロ」、5.2リッターV10エンジンを搭載するハイパワースポーツワゴンの「RS6 アバント」の2台。ほか、スーパースポーツ「R8」も注目を集めていた。



▲「S5 4.2 FSI クワトロ」

▶「RS6 アバント」



ベントレー

世界限定550台のプレステージクーペに視線集中



ベントレーブースの主演は、世界限定550台という少量生産のプレステージクーペ「ブルックランズ」。5.4メートルに達する巨大なボディは、ベントレー伝統の古典的かつ優美な装い。エンジンも伝統の6.7リッターV8を採用。インテリアは美しいタン色のフルレザー。ほか、新世代ベントレーモデル「コンチネンタルGTスピード」も展示されている。



世界550台限定「ブルックランズ」



美しいタン皮内装

ランボルギーニ

パワーアップ、軽量化でさらに魅力アップ



530馬力の「ギャルド・スーパーレジェーラ」

ランボルギーニブースのメインは、V10エンジンを搭載した「ギャルド・スーパーレジェーラ」。ノーマルの「ギャルド」に比べてボディを約100キロ軽量化するとともに、エンジン出力を10馬力アップの530馬力とし、動力性能をさらに向上させたモデルだ。640馬力エンジンを搭載する大型スポーツ「ムルシエラゴLP640」もお目見えしている。

- 講演者：前田 了（経済産業省 製造産業局自動車課 課長補佐）
 清水 和夫（モータージャーナリスト）
 荒井 一真（富士重工業 スパル技術本部技術開発部 主査）
 高岡 俊文（トヨタ自動車 ハイブリッドシステム開発部 主査）
 渡辺 正五（日本自動車研究所 FC-EVセンター長）
 辰巳 国昭（産業技術総合研究所 ユビキタスエネルギー研究部門 蓄電デバイス研究グループ長）
 姉川 尚史（東京電力 技術開発研究所 電動推進グループマネージャー）

■主催： 日本自動車研究所



前田 了氏



清水和夫氏

地球温暖化対策が各国共通の緊急課題となる中、二酸化炭素（CO₂）などの汚染物質を走行中は排出しない電気自動車をはじめ、ハイブリッド自動車、さらに、究極のエコカーである燃料電池自動車への期待が高まっている。

東京モーターショーでも、多くのメーカーが地球温暖化防止に向けたクリーンカーのコンセプトモデルや、最新技術を提示。前回（2005年）に引き続き第2回となる今回のシンポジウムでは、そうした進化を続ける環境技術の展望などを7人の講演者が専門的な立場でスピーチした。

主催者を代表して日本自動車研究所の小林敏雄所長が開会のあいさつを行った後、まず前田氏が行政の立場から「次世代自動車と日本の環境・エネルギー戦略」について「技術の多様化こそが日本の戦

略だ」と指摘し、「世界一やさしいクルマ社会構想」の青写真を述べた。次いで、清水氏は、「スーパーカーでも環境対応は避けて通れない」と強調し、「エコとエコ」が交錯している自動車メーカーの現状を紹介。続いて、メーカーの立場から、富士重工の荒井氏が電気自動車を、トヨタの高岡氏が進化するハイブリッド技術について説明した。

15分間の休憩後、渡辺氏が「燃料電池自動車開発」、辰巳氏が「電気自動車用次世代電池」の現状と展望を分析。姉川氏は「持続可能なモビリティのためのインフラ整備」について語った。リチウムイオン電池など、安全性や経済性を追求したバッテリーの進化がモビリティ社会へ移行する鍵を握るというのが結論。最後に、日本自動車研究所の林直義理事が開会のあいさつを行い、429人が出席し、4時間にわたるシンポジウムは閉会となった。

SPECIAL

トレーラーから新エネルギーバスまで
商用車の走りを一挙に体験

3軸タイプの大型トレーラー



バイオディーゼルバス

毎日のように路上で見かけるトレーラー、トラックなどの商用車に実際に乗る機会は案外少ないもの。東京モーターショー会場の幕張メッセ周辺にて、そのトレーラーから小型トラック、バスなど、大小さまざまな商用車の走りを体感できる商用車同乗試乗会が行われている。とくに人気が高いのは、馴染みの薄い貨物車。会場ではトレーラーの助手席に乗っ



トレーラーのトラクターヘッドは乗り込むにもひと苦労

た子供が、着座位置が想像以上に高いことに驚き、歓声を上げることもしばしば。バイオディーゼル車や燃料電池車など、次世代エネルギーを使ったモデルも用意されており、こちらも人気の的となっていた。

EVENT

今日のイベント(予定)

10月31日
(水)

● シンポジウム 第2回 アジア環境専門家シンポジウム

14:00~17:00 (国際会議場2階 国際会議室)

● 第5回 全日本 学生フォーミュラ大会参加車両・デモ走行

(中央休憩ゾーン)

11:00~12:00 / 13:30~14:30 / 15:30~16:30

● スロットカー・サーキット

10:00~18:00 (北ホール2階・キッズパーク)

● ミニシアター〜クルマの夢・楽しさ・素晴らしさ〜

10:40~12:25 / 13:05~17:35 (国際会議場3階 302号室)

● 4×4 アドベンチャー同乗試乗会

11:00~16:00 (幕張海浜公園Gブロック内 特設専用コース)

● セーフティドライブ体験試乗会

11:00~16:00 (幕張海浜公園Gブロック内 特設専用コース)

● クリーンエネルギー車同乗試乗会

11:00~16:00 (幕張海浜公園D・Eブロック内 特設専用コース)

● 商用車同乗試乗会

11:00~16:00 (幕張メッセ周辺公道
幕張メッセ南休憩ゾーン東側通路発着)

※試乗券配布場所：幕張メッセ南休憩ゾーン西側 ※天候等の都合により予定が変更になる場合があります。



KONICA MINOLTA



高速・高画質・高品質 最大65枚フルカラー出力

印刷から加工までインラインで高速処理。多様なニーズに応えるハイパフォーマンス。

※A4ヨコ

ON DEMAND PUBLISHER C65

The essentials of imaging

このニュースは、コニカミノルタ
ON DEMAND PUBLISHER
C65で出力しています。コニカミノルタ ビジネスソリューションズ株式会社
プロダクションプリント事業部
TEL 03-5205-7820
URL <http://konicaminolta.jp/pr/odp>

The 40th

TOKYO MOTOR SHOW 2007

10月30日の入場者数 56,000人

入場者数累計 379,300人

東京モーターショーニュースVol.7 2007年10月31日発行

発行所 社団法人 日本自動車工業会 広報室

〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館

TEL.03-5405-6119 FAX.03-5405-6136

WEB SITE www.tokyo-motorshow.com

JAMA